

私が日本中世英語英文学会に入会したのは、米国留学を終えて帰国した 1989 年であったと記憶しています。同年の 12 月に東京大学教養学部で開催された第 5 回日本中世英語英文学会全国大会で早速、研究発表 ("Prosaic *Here-toga* vs. Poetic *Folc-toga*") の機会を与えられ、留学先に提出した博士論文の一部をそこで披露させていただきました。大きな学会で発表したのは、その時が初めてでしたので、非常に緊張したことを今でも覚えております。(学会の会場であった東大では、当時、土曜日・日曜日は暖房が入らず、鉄筋コンクリートの会場が底冷えし、その所為か、翌日から高熱で寝込んだことも記憶しています。)以降も、第 11 回全国大会 (1995 年) の研究発表「Ælfric 訳における Judith 像 - 外典「ユディト書」と比較して」、第 16 回全国大会シンポジウム (2000 年) における発表「古英詩の語彙研究 - 'drink' と 'food' を表す語を中心に」、第 22 回全国大会 (2006 年) における研究発表「古英詩における weak man」など、おおよそ 5 年周期で貴重な発表の機会をいただき、学会はいわば私の研究の「ペースメーカー」となっています。

さて、日本中世英語英文学会とは研究面だけでなく、大会準備委員、評議員、事務局長としてその運営面にも微力ながら関わって参りました。中でも印象に残っているのが、小川浩会長のもと、2001 年 4 月から 2003 年 3 月まで勤めた事務局長時代のことです。当時は、学会は一つの重要な節目にあり、学会事務の一部外部委託、評議員改選における予備選の導入、研究助成委員会の発足など、様々な新たな試みが始まったところでした。事務局業務の一部外部委託は、多大な犠牲的奉仕によって成り立っていた事務局の運営から少しでも負担を軽減すべきであるという趣旨で始められましたが、その実現には、私の前任の山内一芳事務局長のご尽力に負うところが多かったと思います。ところが、その後、学会の財政難、事務を委託していた学会事務センターの破産によって、事務の外部委託は頓挫してしまいました。しかし、今後も長きにわたって学会を運営していく中で、果たして一部の学会メンバーに事実上研究停止の 2 年間を強いるのが妥当なのか、また、事務局の引き受け手を永続的に確保できるのかといった問題は、今後も議論が必要かと思われまます。

一方、2001 年度より新たに始まった研究助成セミナーは、その後も様々な分野の第一人者を講師として招き、多くの若手研究者・学生の参加を得ていることは喜ばしい限りです。(私の指導した大学院生もその都度参加させていただき、大変有益な勉強をさせていただきました。)特に、第一回セミナー (David Dumville, Patrick O'Neill 両教授による古文書学入門) を企画された和田葉子委員長を始めとする研究助成委員の先生方のセミナーに対する熱い思いに、当時事務局長として直接ふれることができたのは、私にとっても大変貴重な経験となりました。こうした学会に対する思い、とりわけ若い研究者や学生を積極的にサポートしていこうという姿勢がある限り、学会の将来に曙光

を見いだせるのではないかと確信しております。